

パネルディスカッション

テーマ「川の賑わいと安心で”川ガキ”を育てよう！」

司会・環境活動支援センターえこらぼ 兼松方彦 氏

パネラー・NPO法人仁淀川 お宝探偵団 城下秀二 氏

パネラー・NPO法人 環境の杜こうち石川妙子 氏

パネラー・たかはし河川生物調査事務所 高橋勇夫 氏



パネルディスカッションの様子

兼松

・物部川の「川の駅」の紹介。夏場には釣りを教えたり、チャン鉄砲を教えたり、親ガキが付いて教えている。テント張りで構えて、どこでも出来るような形。秋にはアユの産卵場へ行って、夕方子どもたちにウェーダーを着させて、子どもたちが川に入って石をめぐってアユの卵を確認したり、こういうこともやっている。実際に川遊びを危険を避けながらやらせてもらう。こういうことを物部川では「川の駅」ということでやってきた。こういうことをイメージして、仁淀川でも川ガキを育てることについて、皆さんと議論していけたらどうかと考えている。川ガキのイメージを、まず、お一人ずつ語ってもらいたい。正しい川ガキ、落第生の川ガキはこんなイメージといったことを語ってもらいたい。

城下

・カヌー教室でも、中学生たちが勝手に自分たちで泳いで、チャン鉄砲で付いたり、自分たちでバーベキューコンロを持ってきて、手長えびを焼いて食べている。この姿を見ると川ガキだなと感じる。川には安全なところはなく、危険なところは避けながら遊ぶ。小さいころからずっと積み重ねてきた、川での経験を積んできた子どもたちが遊んでいるといった姿が、川ガキの一つの形だと思う。

石川

・川で遊ぶのは楽しいが、中には、川の中の石をはぐって、じーっと眺めている子どもがいても良いと思う。最初は水生昆虫でも良いし、魚でも良いし、川についてすごく興味があることを持っていて、熱く語れる子どもが正しい川ガキではないか。

高橋

・自分にとって川ガキとは、自分で魚を獲れることが条件。水生昆虫でも良いが、私は魚のほうが上だと思うがどうか。もう一つは、自分は小さいときに川で溺れかけたことがあるが、1つ2つ上のお兄ちゃんが助けてくれた。そういう何らかの形で危機管理が出来ている子どもたち、この2つの条件を満たしているのが、川ガキと言えると思う。

兼松

・今、高橋さんから子どもたちということがでたが、城下さんもみんなで徒党を組んで活動しているが、

一人でどうこうより、そういうことも条件でしょうか。川ガキは群れを組んでいるのでしょうか。

城下

・あまり離れすぎではいけないが、上から下までのある程度の年代、ちょっと上の経験知のあるお兄ちゃんたちが助ける、こういうのが川ガキというより、川ガキという一つの世界があるということだ。こういう子どもを育てるのは、川の側で育てるしかないが、実際、川の側に住んでいない場合は、親子の体験の中であるしかない。徒党を組むというのが難しくなっている。

兼松

・特に高知市なんかは、川へ行くなど言われていると聞くと、そういうことも大事だ。そういう場を設けるときに、本題に入っていきが、先ほど物部川の「川の駅」をみてもらったが、固定した場所があるのではなく、色んな場所に出かけていながら、ということを物部川でやったが、その中で、高橋さんや石川さんには講師としてやってもらったが、物部川での「川の駅」はどうだったか。

高橋

・正直言って意外なことの連続だった。結構冷めている感じかなと思っていたが、新しいことの経験に対して敏感に反応する。私はアユの産卵場をメインに担当したが、11月の寒風の中、水にぬれながら、いつまでたってもやめない。本当に卵を見るだけ、水槽でアユが卵を産む姿を見せたりしたが、本当にイキイキとしてくれている姿を見て、感動した。

石川

・私はかつて物部川漁協の理事をやってあって、漁協の人と一緒に子どもたちに川遊びの楽しさを教えていたが、やっぱり知ったらすぐのめりこむが、知る機会が圧倒的に少ない。親の世代から川遊びの経験が無くなってしまっている。世話好きのおじさん達が川遊びを教えてあげたりしないと、これからの子どもたちは育っていかない。学校へ行って水生生物の観察会とかやっているが、中学生であれ高校生であれ、生き物を見ると目が輝く。人間は狩猟採取本能を持っていて、それが満たされるというのもすごく大事で、喜びが得られる。そういう体験というのを味わって欲しいし、そういう子どもたちを見ると嬉しくなる。

兼松

・子どもたちも場を作ればすぐ反応してくれて、どんどのめりこむし、親が体験してないから子どもが体験できないということで、こういう場を作るということでは、物部川で「川の駅」という名前をつけることで、やりやすくなったという感じはしないか。

高橋

・確かに、色んなところに対して場を作ることの呼びかけをしやすくなったと思う。

兼松

・なぜ「川の駅」をやっているかということ、バラバラでやっていたら認知が少ない。やるならば共通項を持たして、みんなで取組んだらいいんじゃないか、たくさんの方が関わるのが重要じゃないか。実際「川の駅」はすごい人が関わってくれている。川流れという、ライフジャケットを着させて上流から流れて下流でPTAの父兄が受けとめるみたいなこともやったことがある。「川の駅」という名目が出来ればみんなが来やすいので、仁淀川でも「川の駅」と言い出したら、いろんなところでできるのではないかな。

城下

・それこそ河童の川流れを、仁淀川でどうしてもやりたくて、ライフジャケットを県からもらってやってみた。今までは石川さんと「仁淀川ガサガサ探偵団」で水生生物調査とか紙芝居をやっていたが、もう少し川体験をさせてみたいということで、河童の川流れをやってみたかった。自分がやってみたいということもある。安全さえ確保できればずっと川に流れていく気持ちよさというものと、ライフジャケットの安全性をアピールしたいところもあるのだが、それでもなおかつ、川を流れていく楽しさ、いい

意味でのすり込みをしたいという意味で、この前の9月に初めてやってみた。子どもたちの顔が輝いていたのがすごく良かった。

兼松

・そういったことを単独でやるのも良いと思う。それを、名称は「川の駅」でなくても良いと思うし、共通の名前をつけてやる、こういうことが共有財産にならないかなという気がする。例えば水切りの世界大会の中にも、川の駅があって、安全性を訴えているとか、そういう取組みを共有できないかなと。そうならば仁淀川の財産になるのではないかなと思うが。

石川

・もちろん子どもを育てるためにやるのだが、一つ思うのは、川遊びを教えたくてたまらない、おじさんの出番がない。そういうおじさん達と、子どもたちが出会う場でもあって欲しいと思う。この期間、いつからいつまで川の駅をやっているよ、これから川ガキになりたい子ども、昔に川ガキだったおじさんおばさん、みんな集まれ、といった感じでやれば、地域の世代間を越えたつながりが生まれてくると思う。

兼松

・仁淀川メッセージで、生野さんから提案もあったが、イベントを統一するイメージでこういう冠があって、みんなが助け合っているという形が組めないかなという感じがするが高橋さんどうですか。名称なんかは独特の名称があったら良いと思うが。

高橋

・先ほど「すり込み」と言われたが、すごくいいキーワードだと思う。今は体験することがものすごく減っている。ふるさとへなぜ帰ってくるかと言うと、やっぱり体験したことの中で、培われてきているものがすり込みのように身につけているからだと思う。逆に言うと、すり込みがないままに、大人になった場合、ふるさと感のようなものを知りえるのかといったことが疑問で、ふるさと感というものを無くしてしまっていると、高知のような田舎ではすごくハンデになってくる。高知が好きだから何とかしたいという人がいるわけだが、ふるさと感を無くしてしまうと本当に怖いなど思っている。そういう意味で、すり込み体験をするというのは非常にいい機会で、こういう場を設けてやるというのはいい機会だと思う。

兼松

・私も子どものときに鏡川でのすり込みがあるから、今もお手伝いしているが、「川の駅」をやる上で、最低限必要なもの、例えば安全面を必ず教えるとか、そういうルー尔的なものがあった方がいかなという気がするがどうか。

城下

・一つは親が体験が少ないというのがあって、親も含めて子どもと一緒に安全性を学ぶとか、ライフジャケットは非常に安全性の高いもので、ライフジャケットが一つあっただけでもものすごくいろんな面で助かる、ということが僕の川遊びでの一つのルールだ。

石川

・そういう便利なアイテムの普及も重要だと思うし、すごく手間がかかるが、子どもを川のいろんな場所に連れて行って、ちょっと怖い目にもあわせてみるとか、例えば瀬の浅いところでも流れが速ければ足が一步前へ進まないとか。そういう体験を少しずつ地道にやっていくことも大事だ。効率は悪いが体験しないと分からない。ライフジャケットも便利だが、もしライフジャケットが無かった場合どうするか。いろんなきっかけをつくって川の中へ入れるという機会をつくってあげたい。

兼松

・救助ロープの使い方というのを組み込んだこともある。無いよりはマシだし、ペットボトルに水を入れ

れば便利でもあるし。そういうことも知ってほしいと思い川の駅の中で実施したこともある。高橋さんはどうですか。

高橋

- ・安全性って本当に難しいが、石川さんと同じような意見だが、体験的に怖さを少しずつ見につけてもらいたい。自分たちの子どもを思い出すと、ちょっと大きな川に行ったら漁師さんがおってそこへいったらいかと、船から怒鳴られたりしたこともあり、安全性のことで怒られたといったことが結構ある。そういうことが何か出来たら良いと思うが、具体的には思いつかない。それが川の駅ではないかと思う。

兼松

- ・川の駅へ来てくれている間は、ほったらかしで遊ばせて、危ないところは注意するといった状態が川の駅であったほうが良いといったところでしょうか。親ガキになっていない親がたくさんいるので、もちろん親も一緒になって川遊びを楽しむこと。名称は「川の駅」でなくても良いので、流域として一つのまとまったルールというか、物部川は、安全のことも学ぼうというのが一つのルールだったと思うが、そういうのがあることで、仁淀川の呼び物というか、顔になるという気がするし、そこへ行けば仁淀川のルールが分かるという風にならないものか。

城下

- ・川の駅というより、川の家はどうか。高知県の人たちが一番遊んでいる川が間違いなく仁淀川だと思うが、その仁淀川で川遊びというものに対して、安全性や遊びを含めて、川の家みたいなものを作ってみて、そこから情報発信をしたりとか、遊びを教えてくれたりとか、親ガキたちがいるとか、そういう川の家というアットホームなものが仁淀川には必要じゃないかなと思う。

石川

- ・川虫は魚のえさになり、川虫で魚を釣って人間が食べている。人間と川はつながっているんだということを子どもたちに実感して欲しい。川の恵みをもらって自分たちは生きているということを知ってもらいたい。命のつながり、山、川、海のつながりということを川に来て子どもたちに体で感じて欲しいと思う。そういう場として川の駅というものがどんどん広がって行って欲しいと思う。

高橋

- ・野生の魚を捕まえたときの感動は何物にも変えがたい。魚のつかみ取りでは満足できないと思う。漁協の方をお願いしたいが、子どもに釣りを教えるイベントをやってもらい、その中で魚の大切さとか、地域資源のことを考える基となってほしい。

兼松

- ・ぜひ皆さん、今日出された意見を、春から夏にかけて、現場で議論していただき、仁淀川の共有の財産は何なのか、仁淀川の正当な川ガキはこうだと、ぜひ議論していただき実践をしていただきたい。共通性を見出していった財産を築いていっていければと思います。



パネルディスカッションの様子